

小学校教師に求められる資質能力

—小学校本調査の結果分析—

Some Consideration on the Expected Competence and Ability of Elementary School Teachers

-Analysis of Elementary School Survey-

板良敷敏* 小笠原侃* 富田福代* 中尾繁樹* 森田 健* 柳本 哲*

Satoshi ITARASHIKI Tsuyoshi OGASAHARA Fukuyo TOMITA Shigeki NAKAO Ken MORITA Akira YANAGIMOTO

抄 録

本研究の目的は、小学校教師の資質能力を調査し、教員養成および現職教育のプログラムを開発することにある。研究プロジェクトでは、2007年度に幼稚園と小学校を対象に予備調査を行った。その結果、教師と保護者、地域住民それぞれが期待する教師の資質能力について注目すべき点で大きな違いの見られる調査項目が明らかになった。小学校教師の資質能力については、「自らの資質や能力を高めようとする」と「保護者とのコミュニケーションがとれること」、「子どものしつけができること」の三つの項目であった。2008年には、この三点について、教師、保護者、地域住民を対象に聞き取り調査を行い、その結果を分析・考察した。これらの調査研究を踏まえ、2009年度に本調査を行い、本研究の目的は、この本調査の結果を分析・考察し、小学校教師に求められる資質能力を明らかにしようとするものである。

はじめに

学校教育をめぐる様々な問題に対して、学校教育への不満、不信、その解決への期待と要求は、ますます厳しくなっている。これまでに例のない複雑な諸問題の解決のために、教師の役割は一層重要になっており、その資質能力の向上は、行政や学校が早急に取り組みねばならない状況にある。

変化し続ける社会で子どもたちを教育する教師の資質能力は、常に点検、更新していく必要があり、現代の学校教育にふさわしい教師の資質能力を、養成課程、現職教育においていかに育成していくかが喫緊の課題となっている。

これまでの教師教育研究また教育社会学研究では、学校教育に関与する人たち、いわゆるステークホルダーが、実際に学校現場や教師に対しどのような要請をもち、いかなる資質能力を教師に求めているのかということに関する実態の把握は十分ではなかったといえる。そこで、小学校、幼稚園の教師と保護者に対し、今日の社会において、教師に求める資質能力に関する調査を設計し実施す

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

る。この調査によって、今日の初等教育教師に求められる資質能力とその養成に関し、いくつかの仮説を立てることができると考えている。19年度に予備調査、その結果の分析考察を深めるために20年度は聞き取り調査を実施した。

本研究プロジェクトは、予備調査の結果と聞き取り調査の検討から本調査の項目を吟味し、多面的に小学校教員に求められる資質能力も明らかにしようとした。

1. 調査の目的

調査の目的を予備調査の結果を通して述べることにする。予備調査（注1）では、教師や保護者、地域住民との間で、教師に求める資質能力に大きな違いのあることが明らかになったことである。そして、それら大きな違いのあった項目（資質能力）について、調査の信頼性を確保するために教師、保護者に改めて聞き取り調査を行った。その結果は次の通りである。

第一に、調査項目「自らの資質や能力を高めようとする」については、教師は、当然の課題と認識しているのに対して、保護者等は、個別の子どもに直接かかわる能力を高めてほしいと願う傾向がある。また、地域の人からは、教師の社会勉強の必要性と子どもの能力を引き出すだけでなく、教師の資質能力がどの程度高まったかの評価を求める意見もあった。教師、保護者、地域の人々それぞれの立場の違いから、教師の資質能力の受け止めに意見の違いが見られた。

第二には、調査項目「保護者とのコミュニケーションがとれる」では、教師は、保護者としての自覚や社会的なコミュニケーション能力の低下に多くの問題があると考え、保護者は、学校からの一方的な伝達ばかりで保護者に必要のないものが多いと言う。また、多忙な教師に我が子について話をしたくてもできないなどと感じていると言う。

これらのことから、学校と保護者の連携や対話、情報交換の在り方について課題があり、さらに相互の誤解が加わって、学校（教師）不信や保護者不信にもつながっていることが考えられる。また、地域の人からは、教師、保護者双方のコミュニケーション能力、社会性の欠如などが指摘された。双方のコミュニケーションについて学校が困っていること保護者が期待していることがそのまま表れたのではないかと思われる。

第三に、調査項目「子どものしつけができること」について、教師は、子どものしつけは、家庭で行うものと考え（図3）、他方、保護者は、教師の仕事として当然必要な資質能力のことで特筆すべき事ではないという発言が聞かれた。地域の人からは、子どものしつけは、家庭が基本であるが、厳しさの足りない教師の問題と学校と家庭でのしつけの在り方についての相異を考慮する必要があるとの指摘があった。学校や教師は、学校で行わなければならないしつけについて吟味し、同僚と共有し、共に実践する資質能力を伸ばすことだと理解できる。

いずれの項目（資質能力）においても、それぞれの立場で必要性や期待意識が異なる。本調査においても、これらの資質能力は、予備調査同様教師と保護者の間で35%～39%と、大きな認識のずれが見られる。

そのために、本研究においては、教師、保護者双方の認識の違いを確認すると共に、この違いをどのように理解し、小学校教師に求められる資質能力として示すことができるかということである。

本調査の目的は、保護者等のステークホルダーが求める教師の資質能力と教師自身が求める資質能力を、ずれのままに理解するのではなく整合的に理解することであろう。つまり、各調査項目に上げられた資質能力を分析的にとらえるだけでなく、関連的にとらえることであるといえよう。さらに、本調査の最終的な目的は、その結果を本学の教員養成課程のカリキュラムに反映し、学生に教授すべき内容や指導方法の検討に生かすことだと考えている。

注1) 「教育総合研究叢書 第2号」25頁（関西国際大学教育総合研究所2009.3）

2. 本調査の概要

(1) 本調査の設計

今回の本調査にあたっては、19年度の予備調査での調査の設計や質問項目を踏襲しつつ実施した。本調査にあたっては、予備調査と同じ項目を設定し、過去に実施された同種のアンケート調査等の質問項目も参考にしつつ、文教行政が規定する教師像を一定のメルクマールとして設定してみた。例えば、文部科学省「魅力ある教師を求めて」（文部科学省 HP, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/miryoku/03072301.htm)の冒頭に、「教師に求められる資質・能力」が図示されているが、それによると「いつの時代にも求められる資質能力」と「今後特に求められる資質能力」の2つに大別されており、前者が実践的指導力の基礎になるような図式である。前者はまた、時代を超えた普遍性を有する資質能力と理解され、後者は時代の変化が要求する新たな資質能力として規定されている。今回の調査票設計にあたっては、予備調査同様に、これらの図式を参考にしながら、我々として独自の視点を盛り込んで質問項目を列挙した。

本研究が関心を寄せているのは、上記にみられる公式見解として必要性が訴えられているものと、現場を担う教師と自分の子どもを学校に預けている保護者双方の意識や考え方が、どの程度重なり合い、どの程度乖離しているか、という点にある。教育に関するスローガンは、往々にして耳障りがよく、反論の余地を許さない性質の言説が多い。闇雲にそれを否定してかかると、常識を疑われかねないような、もっともらしい言説であるため、その種の資質能力など教師には不要である、というように積極的にネガティブな意見表明することは稀である。今回のように、アンケートの形式で問えば、回答者自身が「なるほど、もっともだ。本当に必要だ」と思う項目は「ぜひ必要だ」と答えるであろうし、そうでなければ「否定はできない」「もっているに越したことはない」→「まあ、どちらかといえば必要だ」と答えることになるであろうと推測する。

つまり、今回の本調査においても、予備調査同様に、列挙した「資質能力候補」のうち「ぜひ必要」という回答が少なかった項目は、当事者（＝教師および保護者）の一群にとっては、さほど重要性を認めていない項目なのだろうと解釈することができる。文教行政サイドの問題認識としては、当然視野に含めておくべきものとして取り上げられた項目であっても、教育に直接関与する当事者

にとっては二の次でよい、と考えられているものもあるだろうと考えられる。

(2) 本調査計画

<本年度の計画>

- 予備調査結果・聞き取り調査結果の総括・・・6～7月
- 本調査制度設計・・・・・・・・・・・・・・・・6～7月
- 本調査実施・・・・・・・・・・・・・・・・10～11月
- 調査結果考察・・・・・・・・・・・・・・・・1月
- 本学カリキュラムへの取り組み・・・・・・・・1月～2月
- 報告書作成・・・・・・・・・・・・・・・・2月

<組織編制>

- 小学校調査担当班（アンケートによる調査実施と考察）
- 幼稚園調査担当班（アンケートによる調査実施と考察）
- 教育行政調査担当班（教育委員会の推奨する教員の在り方、能力などの調査）
- 調査設計データ処理班（調査のエリア、規模、対象等、有効なデータ収集法の制度設計、データ処理）

(3) 調査項目と質問

予備調査同様に、具体的項目の設定にあたっては、教育に直接関与する当事者に尋ねるという視点から、①豊かな人間性 ②実践的な専門性 ③開かれた社会性の3つの観点を挙げて必要項目を検討した。

①豊かな人間性では、「嘘やいじめ、暴力に対する毅然とした態度」や「幅広い教養」「子どもを引きつける表現力」「子どもが好き」「一人一人の個性を大切にする」「社会規範を守り子どもの模範となる言動」「教師としての人間的魅力」等にまとめた。

②実践的な専門性では、「クラスを集団としてまとめる（学級経営力）」「子どもを引きつける表現力」「教科指導力」「生徒指導力（児童理解、健全育成）」「子どもの評価が公正・的確」「国際社会で通用する語学力」「情報機器活用能力」等、実践的指導力を中心とした事項である。

③開かれた社会性では、「地域や保護者とのコミュニケーション（説明責任と連携）」や「教師としての使命感、情熱、意欲、夢やビジョン」「社会への貢献」「地球的規模の問題への関心」「組織や同僚との協調性」等を挙げた。

質問の概要は以下のとおりである。

Q1 小学校教師に必要な資質・能力にはさまざまなものが挙げられますが、以下に並べた各項目について、あなた自身はどのように考えますか。あなた自身の考えに最も近いものに○をつけてく

ださい。

- ・ 選択肢：[ぜひとも必要]
[どちらかといえば必要]
[どちらかといえば必要でない]
[まったく必要でない]
- ・ 項目：34項目[まったく必要でない]

Q2 以下に並べた教師の資質能力について、小学校の教師は、それぞれをおもにどこで身につけるべきだと思いますか。1から10のうち、あなたの考えに当てはまるものに○をつけてください。
(複数回答可)

- ・ 選択肢：[家庭で、身につけるべきである] (以下「身につけるべきである」を省略)
- ・ [高校卒業までに、学校で]
- ・ [短大・専門学校で]
- ・ [大学の学部で][大学院まで進学し]
- ・ [教師になってから]
- ・ [クラブ活動等の課外活動の経験を通して]
- ・ [アルバイト等の就労体験を通して]
- ・ [ボランティア等の社会貢献活動を通して]
- ・ [必ずしも身につけなくてもよい]

Q3 Q1やQ2にあげたもので、小学校教師の資質や能力として、あなたが特に重要だと思うものを1位から5位まで挙げてください。

Q4 自分が資質能力向上のために学びたい場

Q5 自由記述

Q6～10 フェイス項目

3. 本調査の実施

(1) 調査対象について

兵庫県下の小学校において、以下のような対象に本調査を行った。

単位：人

	小学校 (神戸市内5校)
教師	117
保護者	600
	*保護者は3校の全保護者

(2) 調査方法と実施時期

教師については、校長（園長）を通して調査票を配布し回収した。

保護者については、学級で配布し、子どもが持ち帰って保護者が自宅で記入し、封印して学校で回収した。教師に関する回答に、影響が出ないように工夫をした。

調査は2009年12月に実施した。

4. 本調査結果の全体傾向

4-1 小学校教員が必要と考える教師の資質能力

小学校教員が自らの必要な資質能力として挙げたものは、全34項目のすべてにおいて、「是非必要」「どちらかといえば必要」の合計で半数を大きく上回り、65%を超えている。中でも100%となったのが、「子どもの失敗をおおらかに受け止められる」「子どもの模範となるような言動」「子どものしつけができる」「だれとでも協力できる」「同僚とのコミュニケーションがとれる」「多様な考え方・見方を受け入れられる」「クラスを集団としてまとめていける」「保護者とのコミュニケーションがとれる」「子どもをひきつける表現力」「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」の10項目である。

「子どもの失敗をおおらかに受け止められる」「子どもの模範となるような言動」「だれとでも協力できる」「同僚とのコミュニケーションがとれる」「保護者とのコミュニケーションがとれる」の5項目は、子ども、保護者、同僚との人間関係やコミュニケーションに関するもので、教師自身が教師にとって最も重要なものとして位置付けていることが理解できる。また、「子どものしつけができる」「多様な考え方・見方を受け入れられる」「子どもをひきつける表現力」「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」の4項目は、教師の指導技術に関するもので、教科の知識や技術という教科専門内容でなく、教育方法にあたるものだといえよう。

これら10項目に準じて大きな値を示しているものに、98.7%の「教科内容についての知識が豊富」「自らの資質や能力を常に高めようとする」「子ども一人一人の個性を大切にする」「子どもの関心を引き出しながら授業できる」「社会的な規範を守る」「教師としての使命感、情熱、意欲」「子どもの評価が公正・的確」の7項目、また97.4%の「自分自身が夢を抱いている」「子どもが好きである」「子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる」の3項目、97.3%の「子どもの心のケア・教育相談ができる」「子どもの成長・発達に関する専門知識」「幅広い教養をもっている」の3項目、96-96.1%の「考えたことを実行できる」「憧れの対象となるような人間的魅力」「授業技術が身につけている」の3項目、90.8-94.8%の「社会に貢献しようという意識が高い」「得意分野をもっている」「社会の一員として世の中の変化に敏感」「地域の実情について深く理解している」「地球的規模の問題への関心がある」の5項目が続いている。

これらの90%を超える高い割合の項目の内容を見ると、指導技術から子ども理解、また社会人と

しての常識や人間的な豊かさまで、多角的な視点で教師に求められる資質能力が示されていることが読み取れる。続く2項目は下位2、3位であるが、88.2%、86.7%と何れも高い割合を示しており、このことから、リストに挙げた34項目の資質能力のほぼ全ての項目において必要な資質能力であるとしていることがわかる。どの内容も教師として必要な資質能力として自らが認識しているということになる。

一方ここで注目できる項目として、34項目中で唯一65.7%という数値を示した「国際社会で通用する語学力がある」がある。6割を超す教師が「是非必要」「どちらかといえば必要」と回答しているが、86.7%までの他の33項目と比べると1項目のみかけ離れていることがわかる。『平成20年3月告示小学校学習指導要領』以前は、指導科目の中に「外国語」が入っていなかった小学校教師にとって、語学力は身近でないばかりか、教師の資質能力として特に必要とするものでなかったことが読み取れる。しかしながら、同学習指導要領において『外国語活動』が導入後は、小学校5、6年生において英語の指導が必修となっている。調査時点ではごく一部の教師だけが担当していても、教科担任でない小学校では、今後どの教師も5、6年生を担当する可能性があるため、他人事として構えているわけにはいかなくなると考えられる。

4-2 保護者が必要と考える教師の資質能力

次に保護者が考える「教師に必要な資質能力」について見てみよう。同じく34項目中の33項目までが、「是非必要」「どちらかといえば必要」を合わせて80%を超える高い数値を示しており、全体的に見ても教師自身の調査結果と類似する点が少なくない。

まずは95%以上の高い数値を示すものとして、次の20項目が挙げられる。上位から、「子どもが好きである」「だれとでも協力できる」「子どもの関心を引き出しながら授業できる」「子どもをひきつける表現力」「子ども一人一人の個性を大切にする」「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」「子どもの模範となるような言動」「教師としての使命感、情熱、意欲」「教科内容についての知識が豊富」「子どもの失敗をおおらかに受け止められる」「子どもの評価が公正・的確」「クラスを集団としてまとめていける」「幅広い教養をもっている」「多様な考え方・見方を受け入れられる」「社会的な規範を守る」「授業技術が身につけている」「子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる」「考えたことを実行できる」「同僚とのコミュニケーションがとれる」「子どもの心のケア・教育相談ができる」となっており、内容は子ども理解から学級経営、教科の指導力まで広範囲にわたっている。

その次の8項目は、やはり何れも90%を超えており、上位20項目とさほど変わらない高い数値を示しており、保護者が同様に重要な資質能力として認識していると言えるものである。項目内容は、「自らの資質や能力を常に高めようとする」「子どものしつけができる」「憧れの対象となるような人間的魅力」「保護者とのコミュニケーションがとれる」「進学指導上のアドバイスができる」「得意分野をもっている」「社会の一員として世の中の変化に敏感」「子どもの成長・発達に関する

る専門知識」と続き、やはり指導能力やコミュニケーション能力、教科の専門性など広範囲にわたっており、ここでも多様な資質能力を求めていることが読み取れる。

以下、90%未満の6項目は、「地域の実情について深く理解している」「自分自身が夢を抱いている」「社会に貢献しようという意識が高い」「地球的規模の問題への関心がある」「情報機器が活用できる」「国際社会で通用する語学力がある」だが、「情報機器が活用できる」までが81.7%とほぼ同水準で続いている。特徴として、最後の「国際社会で通用する語学力がある」が62.8%と他との比較において低い数値にとどまっており、前節（3（1））の教師の回答と同様に1項目のみ大きな開きが見られる。

一方、上位10位以内でも共通する項目が多く、「だれとでも協力できる」教師100%保護者98.5%、「子どもをひきつける表現力」教師100%保護者98.2%、「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」教師100%保護者98.2%、「子どもの模範となるような言動」教師100%保護者97.9%、「教科内容についての知識が豊富」教師100%保護者97.6%、「子どもの失敗をおおらかに受け止められる」教師100%保護者97.6%の6項目にもものぼる。これらのことから、必要とする教師の資質能力に関して教師と保護者の意識に特に大きな違いは見られず、むしろ共通点が少なくないことがわかる。

5. 小学校教師と保護者の「教師の資質能力」についての意識の差異

5-1 小学校教師が必要と考える教師の資質能力

子どもの成長にとっては教師の教育力が大きく影響する。それは教師一人一人の資質によって大きく左右されることは言うまでもない。学力の低下やいじめ、不登校の増加等々教育現場に山積する課題も多く、社会全体から、教育改革を含め教師の資質向上を求める声は一層強まっており、教師もそれを認識しているのがうかがえる。

今回の本調査の回答集計（図1）では、「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる（89.5%）」が最上位を示し、次に「子どもを引きつける表現力（86.8%）」「自らの資質や能力を常に高めようとする（85.5%）」がほぼ同じ割合で、ほとんどの教師が是非必要と答えている。これは、自身の資質をどう高め、子どもをひきつける授業の在り方はどうあるべきかを考え、子どもたちの様々な変化に対して、どう対応していったらよいのかという危機感を持っていることの表れかもしれない。続いて「保護者とのコミュニケーションがとれる（78.9%）」「クラスを集団としてまとめていける（75%）」「子どもが好きである（72.4%）」「社会的な規範を守る（71.1%）」「子どもの関心を引き出しながら授業ができる（71.1%）」「子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる（71.1%）」という順序で上位を占めている。

全体的な傾向をとらえると、実践的な専門性である学級経営力や教科指導力、生徒指導力に関わる質問である「子どもを引きつける表現力（86.8%）」「クラスを集団としてまとめていける（75%）」

「子どもの関心を引き出しながら授業ができる (71.1%)」「子どもの評価が公正・的確 (69.7%)」という項目が上位を占め、予備調査同様、教師の高い意識がみられる。教師の指導力を問われる事件や事故が多発し、学力低下や学級崩壊等が報道され社会の批判にさらされることの多くなった現在、小学校教師に求められるものとして教師の実践的な指導力向上の必要性が高まっている。この調査結果で、教師もそれを認識していることが分かる。しかし、予備調査では上位にあった「子どものしつけができる 73%⇒ (65.8%)」「授業技術が身につけている 69%⇒ (60.5%)」の2項目に関して必要度が下がっているのは、しつけ、テクニックといった表面上のものより、質を高めるほうへ意識が向いているのかもしれない。

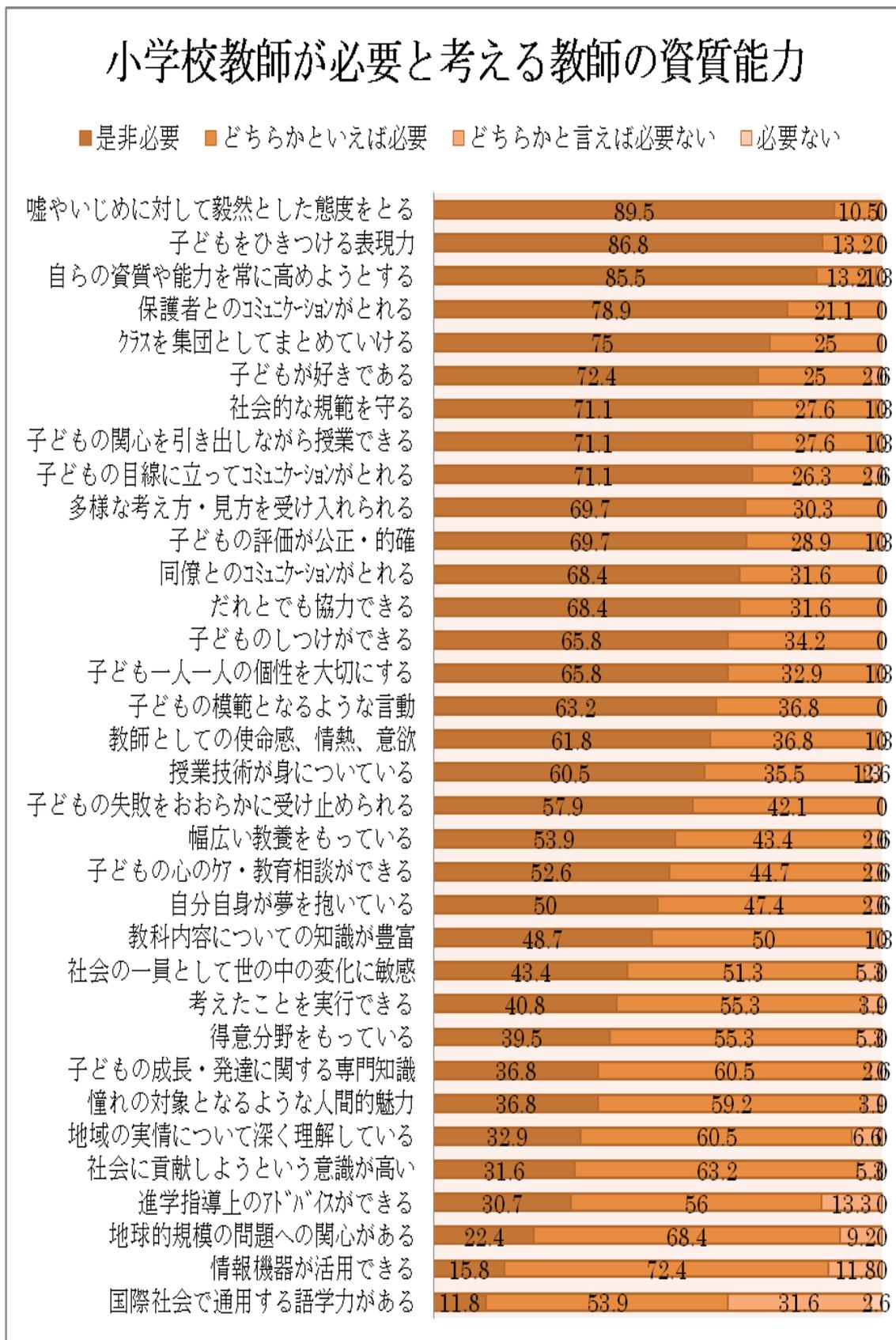
また、教師としての豊かな人間性、いわゆる教師としての感性が求められる「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる (89.5%)」「子どもが好きである (72.4%)」「子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる (71.1%)」「子ども一人一人の個性を大切に作る (65.8%)」という項目に対しても、現在の教育に対する変化や保護者の意識を反映し、教師としての指導技術だけでなく、豊かな人間性を持つことにも高い意識を持っているといえよう。

教師として持っていなければならない使命感や情熱、意欲、規範意識、コミュニケーション能力などに関わる質問である「自らの資質や能力を常に高めようとする (85.5%)」「保護者とのコミュニケーションがとれる (78.9%)」「社会的な規範を守る (71.1%)」等は、教育公務員としての自覚や開かれた社会性、説明責任が一段と要求されている今日、意識が高まるのは当然といえるのかもしれない。さらに、保護者対応に苦慮している教師も多くみられ、保護者とのコミュニケーションが高い位置を占めているのは理解できる。また、「教師として使命感、情熱、意欲 67.3%⇒61.8%」の項目が予備調査に比べて下がっているのが、教師のモチベーション維持も含めて、気になるところである。

小学校教師の実践的な専門性という観点の中でも「教科内容についての知識が豊富 (48.7%)」「得意分野を持っている (39.5%)」「子どもの成長・発達に関する専門知識 (36.8%)」「進学指導上のアドバイスができる (30.7%)」「地球的規模の問題への関心がある(22.4%)」「情報機器が活用できる (15.8%)」「国際社会で通用する語学力 (11.8%)」については、小学校教育は広く浅くという教育であるため、予備調査同様、必要以上の教養や専門知識は必ずしも必要ではないと考えている教師が多いと思われる。しかし、これからは英語活動や地球環境問題、情報教育、特別支援教育等、多様な教育が展開され、専門的知識も必要になると思われるので、専門的な研修を取り入れ、教師の意識を変えていく必要がある。

教師の豊かな人間性という視点から見た「憧れの対象となるような人間的魅力 (36.8%)」「自分自身が夢を抱いている (50%)」「社会に貢献しようという意識が高い (31.6%)」という項目では非必要という回答数が低いのは、教師そのものへのあこがれの低下ということに繋がっていかないであろうか。

図1 小学校教師が必要と考える教師の資質能力



5-2 保護者が必要と考える小学校教師の資質能力

保護者にとって学校は多様な経験を集団で行う教育活動の場であり、知識・技能だけを身につける場でないことは十分理解していると思われる。しかし、社会から得る情報が氾濫し、学力の低下やいじめ、不登校、学級崩壊等の問題に過剰に反応してしまうことも多い。今回の調査でもその傾向が見られ、教師の調査と保護者の調査の中で双方の意識のずれが明らかになるものと思われる。

保護者の側からみた本調査の回答集計(図2)では、「子どもの評価が公正・的確である(78.7%)」が最上位を示し、「子どもの関心を引き出しながら授業ができる(77.2%)」「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる(76.3%)」「子どもが好きである(75.4%)」「子ども一人一人の個性を大切にす(70%)」「クラス集団としてまとめていける(66.7%)」「子どもを引きつける表現力(66.2%)」「子どもの目線に立ってコミュニケーションができる(65.8%)」と続き、上位を占めている。予備調査と比較し10ポイント程度各項目は下がっているが、多くの保護者は自分の子どもを通して教師の資質を見ているということになる。また、ポイントは変わらないが、「クラス集団としてまとめていける(66.7%)」の項目が入ってきたことは、保護者が学級経営自体への不安を感じていることが考えられる。

教師の資質能力として小学校教師が必要と考えた、実践的な専門性すなわち学級経営力や教科指導力、生徒指導力に関わる質問について、保護者は「子どもの評価が公正・的確である(78.7%)」「子どもの関心を引き出しながら授業ができる(77.2%)」という項目に高い意識がみられる。これは前述の学級経営能力も含めた、教師の指導力に不安を持っていることが伺える。また、「授業技術が身に付いている(60.1%)」という大切な授業力を示す項目は、保護者は12位、教師は18位にある。このことは、まさに保護者も教師も資質能力と考えたときに、指導技術はあって当然で、それに加えて普段の生活の中で自分の子どもに向けられるべきものであると考えているということであろう。また、教師が「子どものしつけができる」という項目は65.8%挙げたのに対し、保護者は48.3%にとどまっている。これについては、予備調査と同じで、教師は家庭でしつけが出来ていないので教師がしつけをしなければならないと考え、保護者は、しつけは家庭でと考えていると考えられる。しつけに関しては教師と保護者の間で意識のずれがあり、子どもの学校と家庭での状態像のずれが伺える。

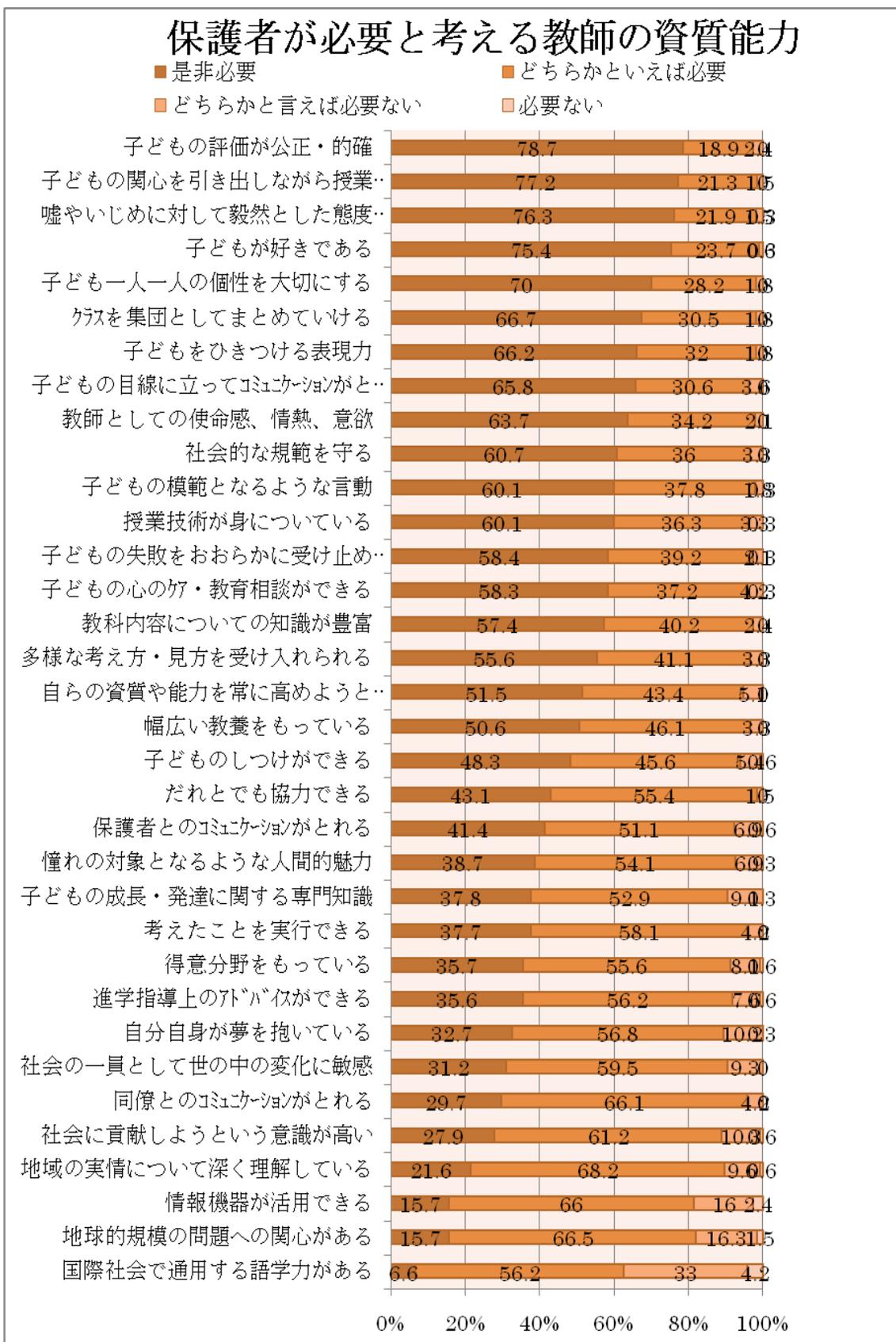
教師としての豊かな人間性、いわゆる教師としての感性が求められる「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる(76.3%)」「子どもが好きである(75.4%)」「子ども一人一人の個性を大切にす(70%)」という項目に対しては、予備調査同様に、現在の教育に対する変化や子どもを取り巻く環境の変化に対応し、教師として指導技術だけでなく、豊かな人間性を持つことを保護者が求めていることが十分うかがえる。特に、いじめについては子どもの生命をも脅かす重大な問題と捉え、危機感を持っていることの表れと思える。この項目については教師側も認識しているが、「子ども一人一人の個性を大切にす」項目は保護者よりも下位に位置している。これは、教師は集団を見ているが、これについても保護者は自分の子どものことが中心にあり、自分の子どもをしっかり見て

欲しい、そのためにはこの項目は教師にとって必須であり、教師に対する強い願いが見えてくるようである。

保護者が必要と考える小学校教師の資質能力調査結果の下位にランクされる「同僚とのコミュニケーションがとれる (29.7%)」「社会に貢献しようという意識が高い (27.9%)」「地域の実情について深く理解している (21.6%)」「地球的規模の問題への関心がある (15.7%)」「情報機器が活用できる (15.7%)」「国際社会で通用する語学力がある (6.6%)」等は、保護者にとって関心が薄いのか、身近な問題でないのかこの調査結果だけでは十分に考察できない。情報機器活用や英語活動は保護者にとっても関心のあることと推察できるが、教師もほぼ同じ項目が下位にランクされていることから、小学校教育の中では、特にこれらの項目に関しては、教師本来の必要とされる資質とは少し視点が違ったものであると考えられる。

いずれにしても、「小学校教師が必要と考える教師の資質能力」と「保護者が考える小学校教師の資質能力」には、様々な家庭背景を持つ子どもをカリキュラムに沿って、集団で指導する側と、目の前の自分の子どもの現実に関心がある保護者の考え方に違いがあることは当然であると考えられる。

図2 保護者が必要と考える小学校教師の資質能力



6. 重要度が低いと解釈できる項目について

教師や保護者が「どちらかと言えば必要でない」「不要だ」と判断している項目については、教職課程における教授内容の優先順位設定が必要な場合に、一定の視点を与える情報にはなると考えられる。

そこで本節では、前節で見たグラフを下層から検討していくことで、今回相対的にネガティブな反応を引き出した項目について考察する。教師側の回答集計から見ると、図1において、「ぜひ必要」という回答がもっとも少なかったのは、予備調査同様「国際社会で通用する語学力」である。11.8%が「ぜひ必要」と答えているに過ぎない。それだけでなく、「どちらかと言えば必要でない」「必要でない」という回答も34.2%と最も多く、むしろ否定的な見解が目立つ。小学校では、学習指導要領の下で、5年生6年生に外国語の時間が設定されたわけであるが、教師自身が十分な語学力を身につけるべきだとは、今回の結果においてもあまり考えられていないことがわかる。

次に「ぜひ必要」の回答が少ないのは「情報機器が活用できる」で、15.8%が「ぜひ必要」と回答しているにとどまる。その他「地球的規模への問題関心」「進学指導上のアドバイス」「社会貢献意識」「地域の実情への理解」なども「ぜひ必要」とする回答が少ない。「情報機器の活用」に関しては日常的にPCの指導時間はあるが、十分に活用できていないのが現状である。ともすれば子どものほうがPC事情に長けているケースもある。小学校の教育課程上では「読む」「書く」「話す」等のまだまだアナログの指導が中心になっていることが伺える。「進学指導上のアドバイス」については、地域差もあるが、受験熱の高い地域では塾が進学指導をしているケースが大半で、教師が行うことは、少ないと考えられる。「地球的規模への問題関心」「社会貢献意識」「地域の実情への理解」の項目は、文部科学省の図式でいえば「時代の変化に対応して新たに要求される資質能力」の範疇に入る。「地球的規模への問題関心」はもとより、重要度が最も低いとされた「語学力」も、「国際社会への対応力」という意味では「グローバル化への対応」の一環である。「社会貢献」は、「社会人としての問題関心」に包摂されうる。「地域の実情への理解」は、「教育の現代的諸問題への対処能力」に関わってくるものと考えられる。

教師自身による回答では、教師として自分自身に求められる資質能力の優先順位を設定する場合に、新しいものに対する関心よりも、目の前の事象解決のための資質に意識がいくのは仕方がない。よって、これらの諸項目は後景に退くことになる。新たな時代にふさわしい資質能力のうちのいくつかは、後回しになっても仕方がない、それ以上に重要な要素があるという認識が全体として析出されていると見ることができる。

今度は、保護者の意識において重要度の低いものを探してみる。(図2)保護者の回答において「ぜひ必要」という回答が最も少ないのは教師同様「国際社会で通用する語学力」である。6.6%が「ぜひ必要」と答えているに過ぎない。また、「どちらかと言えば必要でない」「必要でない」という否定的な回答も37.2%がしており、34項目中最も多い。

「語学力」軽視は、教師側の回答と共通する。しかし、現状は親が子どもに対しては塾等で「語

学力」の修得を強く要請している場合も多くみられる。この場合小学校段階では、外国語の修得をそれほど望んでいないのか、少なくとも学校の先生に、英語の指導まで望んではいないのか。確かに、外国語の時間の導入は小学校でも高学年からなので、低学年・中学年に直接関係する教師や保護者にとっては、関心は薄いであろう。

保護者の回答で「ぜひ必要」が30%に満たないのは「地球的規模の問題への関心」「情報機器活用能力」「地域の実情への理解」「同僚とのコミュニケーション」である。「同僚とのコミュニケーション」以外は、教師側も保護者側もよく似ており、要するに、教師に求める資質能力の優先度という観点からは、「時代の変化に即した対応」のうちある種のもは優先順位が低いということである。それ以上に、もっと重要なことがある、ということになるのであろう。特に「情報機器活用能力」は15.7%しか「ぜひ必要」と回答していない。「どちらかといえば必要ない」「必要ない」も全体の2番目の18.4%が回答している。教師側でも15.8%が「ぜひ必要」と答えているにとどまり、やはり下位から2番目の少数回答にとどまる。PCの使用はどんどん当たり前のことになってきており、ことさら取り立てて求めるほどのことでもないのか、あるいは、小学校の教育活動において、PCの使用はさほど重視されていないのか。ちなみに、これを「不要」と答えた保護者は2.4%いたが、教師のほうでは「不要」と答えた者はいなかった。

保護者の回答でそのほかに「ぜひ必要」の回答が少ないのは、「同僚とのコミュニケーション」で29.7%の回答率である。この点教師は68.4%が、「ぜひ必要」と答えており、傾向がやや食い違っている。教師にとっては、同僚とのコミュニケーション力は、業務遂行上、軽んじることができない要素であるが、保護者にとっては、個々の先生がしっかりしてくれていけばよいという想定なのであろうか。教師間のコミュニティ形成の難しさが保護者にはわからず、コミュニケーションが取れて当然という考え方の上に立っていると思われる。

「コミュニケーション」というキーワードで訊ねている項目は他に「保護者とのコミュニケーション」と「子どもの目線に立ったコミュニケーション」がある。前者は、教師の78.9%、保護者の41.4%が「ぜひ必要」と答えている。後者は、教師の71.1%、保護者の65.8%が「ぜひ必要」と答えている。つまり教師が重視すべきコミュニケーション相手の優先順位として、予備調査同様に、教師側は、保護者>子ども>同僚、なのに対して、保護者のほうは、子ども>保護者>同僚、というパターンになる。保護者のほうは、まず子どもの話を聞いてくれ、という要求が強いのにに対して、教師のほうは、まず保護者との対話が必要だ、と考えているようにも見える。

予備調査結果と同じように、教師の資質能力のうち、「時代の変化に即応した新しい資質能力」のある部分については、現場の教師も保護者も共通して、それほど敏感に反応してはいない。具体的にいえば「語学力」「情報機器活用能力」「グローバリズムへの関心」「社会貢献」「地域の実情認識」などの優先順位が低い。社会の変化に伴って新たに生じてきたニーズについて、必要性をまるで認めないわけではないが、なお教師にとって本質的な課題だというコンセンサスは、弱いと解釈できる。さらに、コミュニケーションの優先順位、という問題がある。保護者にとっては、教師が子どもとコミュニケーションを取れることが何より重要で、保護者自身と話ができることや、教師同士

の意思疎通に対する関心は相対的に弱い。一方、教師にとっては、子どもとのコミュニケーションが重要なのは言うまでもないが、保護者と話ができる能力も同等以上に重視している。同僚との意思疎通も保護者が考える以上には重視している。これらは教師のコミュニケーション能力の低下と保護者との対話及び指導力そのものの自信のなさに関する不安が背景にあると考えられる。

7. 資質・能力を身につける場について

7-1 小学校教師が考える「身につける場」

本調査の Q2 では、Q1 に示した教師の資質能力を小学校教師はどこで身につけるべきかを教師、保護者それぞれに尋ねた。選択肢は 10 項目であり、1～9 は「() で身につけるべきである。」という形式をとり、選択肢 10 は「必ずしも身につけなくてもよい」とした。複数回答が可能である。

この設問のねらいは、教師に必要な資質能力はどの段階で身につけるのが妥当であるのかをさぐることにある。集計によって、おおまかな傾向として、家庭および高校までの学校段階で身につけるべきだと考えられている資質能力、大学の学部で身につけるべきだと考えられている資質能力、そして教師になってから身につけるべきだと考えられている資質能力がとらえられる。特に教員養成カリキュラムの構築にあたっては、「大学の学部で、身につけるべきである」と回答があった資質能力に注目する必要がある。また現職研修の必要性はますます高まり、今後の方針はまだわからないが、教師免許更新制度の導入が平成 20 年度から始まった。大学として現職研修のニーズにいかに対応していくかは大きな課題である。「教師になってから、身につけるべきである」と回答があった項目の傾向を知り、研修プログラムの開発に生かしていくことが求められる。

はじめに、教師の回答集計について考察する。教師が「家庭で身につけるべき」と考えた資質能力(図 3) は上位から、「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる (29.5%)」「社会的な規範を守る (29.1%)」「自分自身が夢を抱いている (26.7%)」「子どもの規範となる言動 (25.2%)」「考えたことを実行できる (24.7%)」となっている。「高校卒業までに学校で身につけるべき」(図 4) と考えた資質能力は、「だれとでも協力できる (26.6%)」「自分自身が夢を抱いている (22.1%)」「考えたことを実行できる (20.1%)」「自らの資質や能力を常に高めようとする (18.4%)」「国際社会で通用する語学力がある (18.2%)」の 5 項目が高い数値である。「自分自身が夢を抱いている」「考えたことを実行できる」は「家庭」と「高校まで」で共通、「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」は「高校までの学校で」においても上位 7 位、「だれとでも協力できる」は家庭においても上位 8 位にある。これらはいずれも社会的な態度にかかわる項目で、小学校教師は家庭あるいは高校までの学校でまずは社会的な態度を身につけておくべきだと考えていることがわかる。また、「自分自身が夢を抱いている」「考えたことを実行できる」がどちらも上位に位置している理由として、最近の子どもたちのアイデンティティの確立の遅さが考えられる。夢も持たずに、自立もできずだらだら過ごしてしまいがちな最近の若者の様子が背景にあるかもしれない。ただし予備調査で「社会的

な規範を守る」は「高校までの学校で」は高い数値だが、「家庭で」は0回答であったが、今回は「家庭で」が2番目に位置し、少なくとも今日教師は規範意識は家庭でも学校でも身につけるべきだと考えられている。時代を遡っても同じ意識であったかどうかは教師養成の範疇を超えて興味深い問題である。「多様な考え方・見方を受け入れられる」も、予備調査では高校までの学校では高い数値だが、家庭では0回答であった。しかし、今回はどちらもが上位に位置している。教師は家庭や高校までの学校で「多様な考え方を受け入れられる」場としてとらえていることがうかがわれる。

教師の回答集計の「大学の学部で身につけるべき」と考えた資質能力(図5)については、「子どもの成長・発達に関する専門知識(31.2%)」「教科内容についての知識が豊富(30.3%)」「幅広い教養をもっている(29.7%)」の3項目が高い数値を示した。さらに「情報機器が活用できる(29.4%)」「得意分野を持っている(28.6%)」「国際社会で通用する語学力(28.1%)」「教師としての使命感、情熱、意欲(26.1%)」が続いている。これらの項目は家庭や高校までの学校での上位項目とはうってかわり、教える内容・教える対象についての知識に関連したものである。ただし高校までの学校でも「国際社会で通用する語学力」は最上位ではないものの上位にはいっている。予備調査では上位にあった「自らの資質や能力を常に高めようとする」は今回は9番目に位置している。学びの態度特性に関する項目で、中等教育から高等教育において育成されると考えられていることがわかる。

教師の回答集計の「教師になってから身につけるべき」と考えた資質能力(図6)では、これまでの集計に比べて各項目の数値がかなり高いことがみてとれる。50%以上が「教師になってから身につけるべき」と答えた項目が10項目もあり、「大学の学部で身につけるべき」資質能力で上位と考えた30%までを数えると全34項目中21項目にもなる。小学校教師にとって、「教師になってから身につけるべき」と考えられている項目がいかに多いかが推察される。最上位は「進学指導上のアドバイスができる(74.7%)」、以下順に「授業技術が身につけている(72.2%)」「クラスを集団としてまとめていける(68.8%)」「子どもの関心を引き出しながら授業できる(66.3%)」「子どもの心のケア・教育相談ができる(62.5%)」「保護者とのコミュニケーションがとれる(59.1%)」「子どもの評価が公正・的確(57.3%)」「地域の実情について深く理解している(57.1%)」「子どものしつけができる(53.3%)」「子ども一人一人の個性を大切にする(52.7%)」「子どもの成長・発達に関する専門知識(48.6%)」と続く。これらは学級経営や授業方法等に関わる項目が多い。この中に、「家庭で身につけるべき」、「高校卒業までに学校で身につけるべき」、「大学の学部で身につけるべき」資質能力の上位に位置付いた項目は少ない。日常の生活指導、子どもへの接し方、授業のやり方、地域や保護者との関係づくり等は、現場に出て日々の実際の教育活動によって身につくということが実証されている。

図3 教師が回答した家庭で身につける資質能力

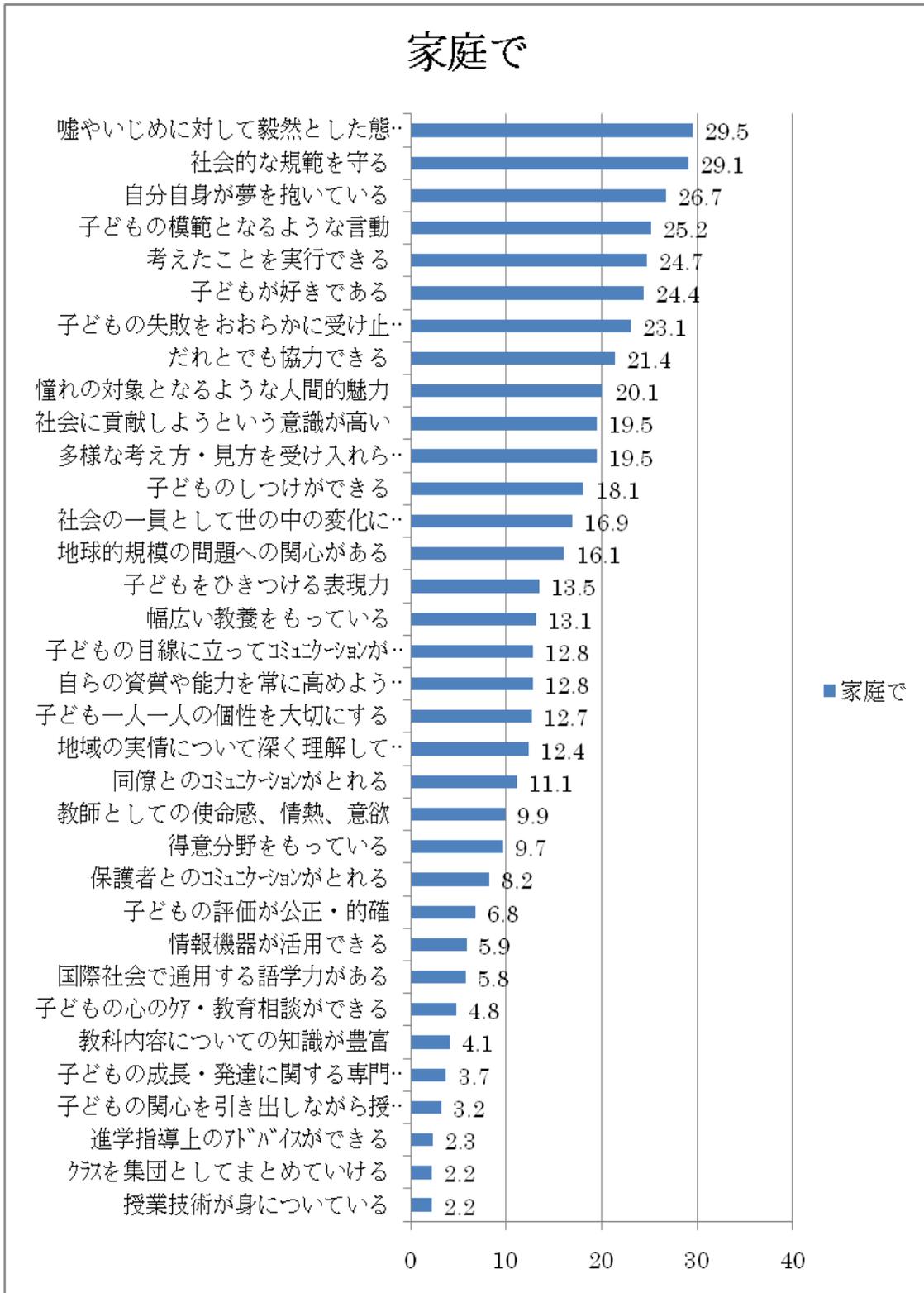


図4 教師が回答した高校までの学校で身につける資質能力

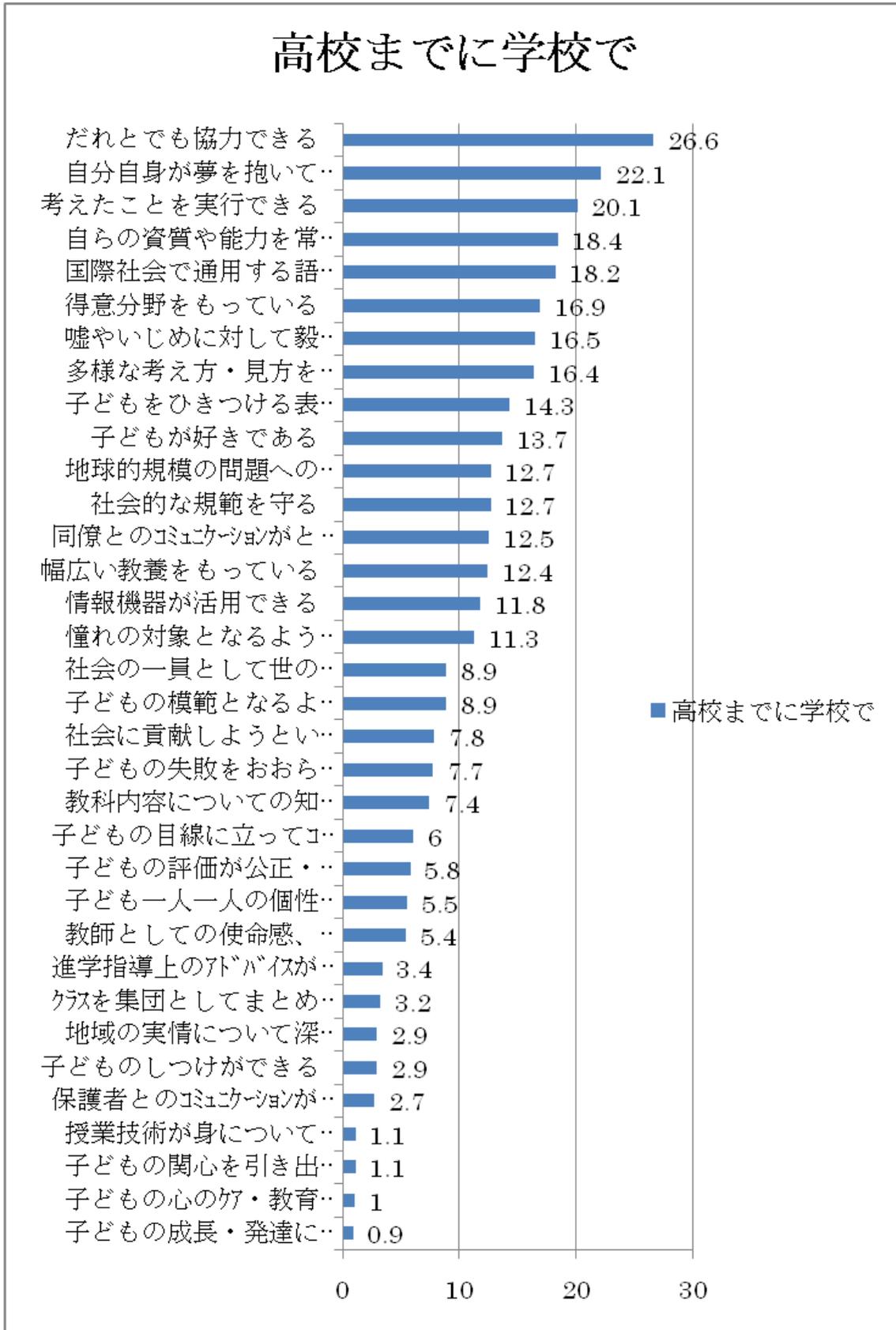


図5 教師が回答した大学の学部で身につける資質能力

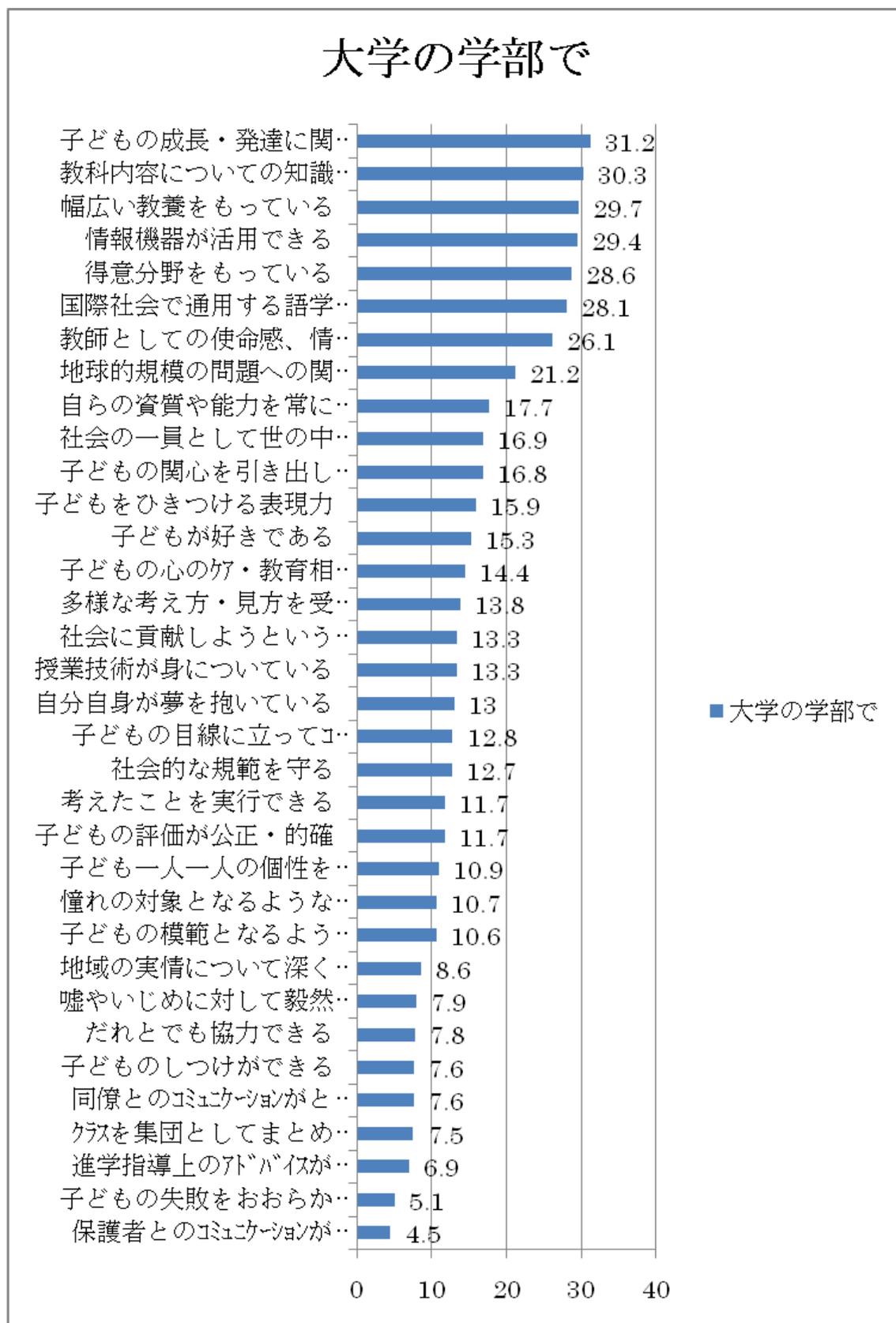
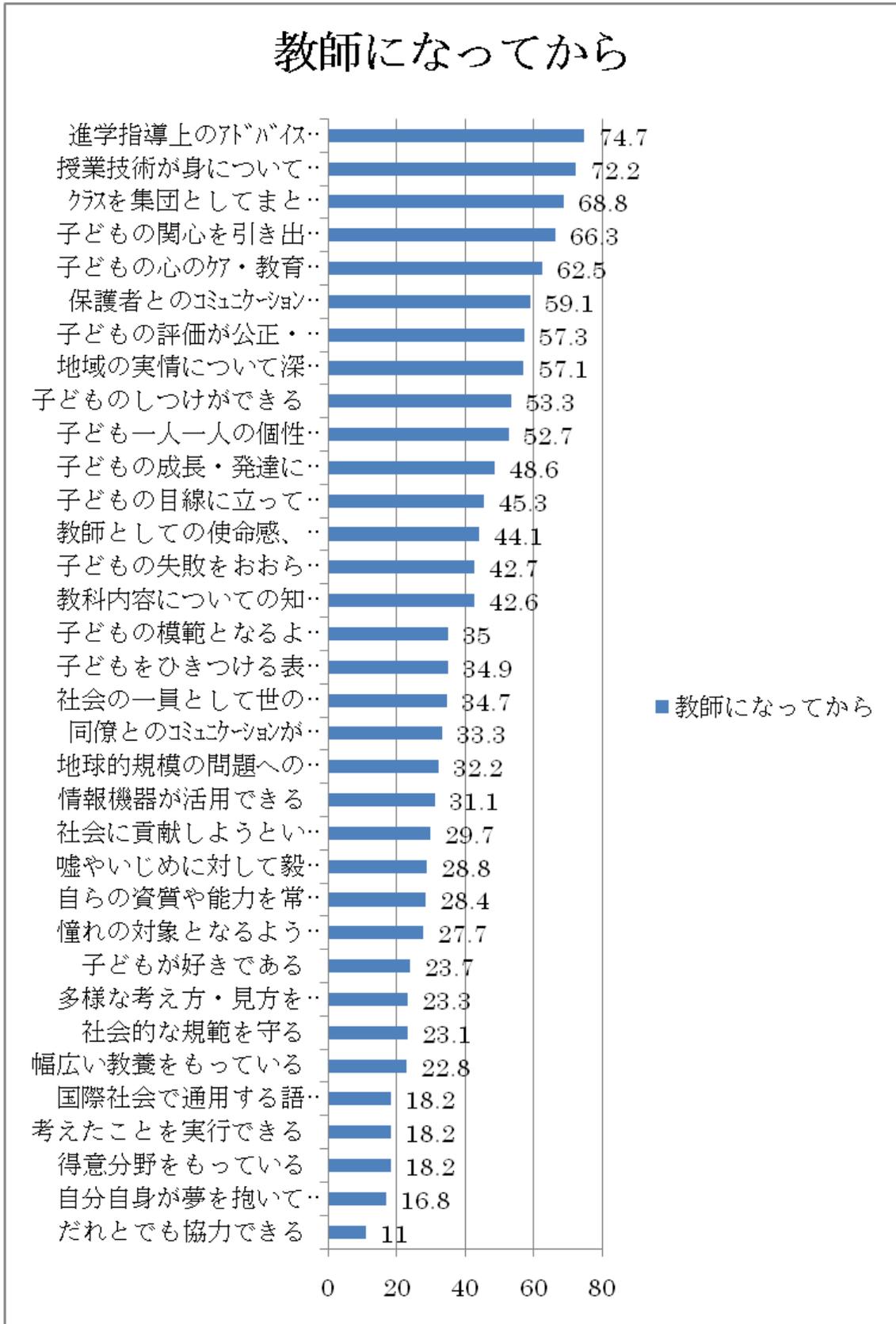


図6 教師が回答した教師になってから身につける資質能力



ここで、第1節でまとめた全体傾向とのかかわりから考察を加える。小学校教師が全体として「ぜひとも必要」とした上位に位置付いた「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる（89.5%）」が最上位を示し、次に「子どもを引きつける表現力（86.8%）」「自らの資質や能力を常に高めようとする（85.5%）」「保護者とのコミュニケーションがとれる（78.9%）」「クラスを集団としてまとめていける（75%）」「子どもが好きである（72.4%）」「社会的な規範を守る（71.1%）」「子どもの関心を引き出しながら授業ができる（71.1%）」「子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる（71.1%）」について教師はどこで身につければよいと考えているだろうか。個別の項目の多重回答をまとめた数値によると（表1）、「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」については、「家庭で身につけるべき」と答えている数が一番多く、「教師になってから身につけるべき」「高校までの学校で」と続いている。「子どもを引きつける表現力」「自らの資質や能力を常に高めようとする」「保護者とのコミュニケーションがとれる」「クラスを集団としてまとめていける」「子どもの関心を引き出しながら授業ができる」「子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる」「クラスを集団としてまとめていける」は先に述べたように、「教師になってから身につけるべき」として高い数値を示している項目である。個々に見ていくと、「子どもを引きつける表現力」「子どもの関心を引き出しながら授業ができる」「子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる」の項目では第2番目に「大学の学部で身につけるべき」が多いが、「教師になってから身につけるべき」と答えた数との差は大きい。「自らの資質や能力を常に高めようとする」については、「教師になってから」が一番多く、「大学の学部で」と「高校までに学校で」の割合が拮抗し、「家庭で」においても一定程度出現している。すなわちこの資質能力は生涯を通じて身につけるべきだと考えられていると言える。これは順位こそ違おうが、「子どもが好きである」「社会的な規範を守る」の項目にも該当する。

表1 小学校教師が全体として「ぜひとも必要」とした上位に位置付いた項目の身につける場

	嘘やい じめ	表現 力	自らの 資質	保護者 コミュ	クラス 集団	子ども が好き	社会的 規範	子ども の関心	子ども の目線
家庭で	29.5	13.5	12.8	8.2	2.2	24.4	29.1	3.2	12.8
高校までに学校で	16.5	14.3	18.4	2.7	3.2	13.7	12.7	1.1	6
短大専門学校で	3.6	3.2	4.3	1.8	2.2	5.3	3	3.2	3.4
大学の学部で	7.9	15.9	17.7	4.5	7.5	15.3	12.7	16.8	12.8
大学院で	2.2	1.6	4.3	1.8	1.1	3.1	3.7	3.2	2.6
教師になってから	28.8	34.9	28.4	59.1	68.8	23.7	23.1	66.3	45.3
クラブ活動等で	5	6.3	5.7	6.4	7.5	3.8	5.2	3.2	6
アルバイト等で	3.6	4	4.3	8.2	3.2	3.8	6.7	2.1	5.1
ボランティア等で	2.9	6.3	3.5	7.3	3.2	5.3	3.7	1.1	6
身につけなくてよい	0	0	0.7	0	1.1	1.5	0	0	0

7-2 保護者が考える「身につける場」

次に保護者の回答集計の結果について述べる。保護者が「家庭で身につけるべき」と考えた資質能力(図7)は上位から、「社会的な規範を守る(30.3%)」「子どもが好きである(29.8%)」「子どものしつけができる(29.7%)」「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる(27.0%)」「考えたことを実行できる(23.9%)」である。「高校までの学校で身につけるべき」と考えた資質能力(図8)の上位は「だれとでも協力できる(27.1%)」「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる(19.3%)」「自分自身が夢を抱いている(18.3%)」「考えたことを実行できる(15.6%)」「自らの資質や能力を常に高めようとする(14.8%)」である。上位5位のなかで重なっている項目は、「考えたことを実行できる」「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」の2項目で、社会的な態度と自立にかかわる資質能力である。

保護者が「大学の学部で身につけるべき」と考えた項目では「教科内容についての知識が豊富(34.2%)」「子どもの成長・発達に関する専門知識(32.5%)」「国際社会で通用する語学力(30.8%)」「幅広い教養をもっている(29.7%)」「情報機器が活用できる(28.2%)」が上位に位置する。(図9) 大学は語学力、情報機器等の知識を身につける場であるという認識が見られるが、保護者にとっては知識の中に子どもの成長・発達に関する専門知識が位置づけられているということである。

保護者が「教師になってから身につけるべき」と考えた項目では、最上位「進学指導上のアドバイスができる(55.7%)」が大変高い数値である。(図10)「保護者とのコミュニケーションがとれる(46.0%)」「授業技術が身につけている(45.5%)」「子どもの関心を引き出しながら授業ができる(44.1%)」「子どもの評価が公正・的確(42.3%)」「子どもの心のケア・教育相談ができる(40.1%)」「教師としての使命感、情熱、意欲(38.9%)」と続く。進学指導や評価、保護者とのコミュニケーションの数値が高いことは、今日の教育課題を浮き彫りにしている。

保護者についても、第1節でまとめた全体傾向とのかかわりから考察を加える。保護者が「ぜひとも必要」ととらえた資質能力の上位は、「子どもの評価が公正・的確である(78.7%)」が最上位を示し、「子どもの関心を引き出しながら授業ができる(77.2%)」「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる(76.3%)」「子どもが好きである(75.4%)」「子ども一人一人の個性を大切にする(70%)」「クラス集団としてまとめていける(66.7%)」「子どもを引きつける表現力(66.2%)」「子どもの目線に立ってコミュニケーションができる(65.8%)」である。「子どもの評価が公正・的確である」が最上位を示し、「子どもの関心を引き出しながら授業ができる」の項目は、教師より保護者が「ぜひとも必要」と考えている項目である。表2を見ると、これらの項目はどちらも「教師になってから身につけるべき」の割合が一番高く、続いて「大学の学部で身につけるべき」「家庭で身につけるべき」という順である。「子どもが好きである」については「家庭で身につけるべき」の割合が高く、「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」については「家庭で身につけるべき」の割合が高く、「教師になってから」「高校までに学校で」の順が続いている。「子ども一人一人の個性を大切にする」「クラス集団としてまとめていける」「子どもを引きつける表現力」「子どもの目線に立ってコミ

コミュニケーションができる」は「教師になってから身につけるべき」の割合がかなり高い。

資質能力をどこで身につけるべきかについて、保護者の意識と教師の意識にはそれほどきわだった違いはないが、子どもに直接関わる項目の出現順位が保護者の方が高い。家庭で身につけるべき資質として保護者が上位に挙げた「子どもが好きである」「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」を教師はやはり「家庭で」と挙げてはいるものの保護者より順位は下がる。後者については教師になってからのほうが高い順位である。

表2 保護者が全体として「ぜひとも必要」とした上位に位置付いた項目の身につける場

	評価 公正	子ども の関心	嘘やい じめ	子ども が好き	子ども の個性	クラス 集団	表現力	子ども の目線
家庭で	11.3	4.8	27	29.8	18.8	6.8	13.4	18.9
高校までに学校で	3.9	3.3	19.3	14.5	7	9.8	9.3	8.1
短大専門学校で	4.9	6.5	5.4	6.5	4	4.1	5.5	5.9
大学の学部で	15.2	21.3	8.2	12.9	10.9	11.8	19	15.2
大学院で	5.6	5.9	3.9	3.1	2.6	2.5	2.8	3.5
教師になってから	42.3	44.1	22.9	17.5	37.3	35.5	25	30.8
クラブ活動等で	5.6	5.6	5.2	3.8	7.7	16	10.4	5.3
アルバイト等で	5.5	4	3.6	3.8	5.3	7.3	7.4	4.8
ボランティア等で	5.3	4.4	4.3	6.9	6	5.9	6.2	6.8
身につけなくてよい	0.4	0.2	0.2	1.1	0.4	0.4	1.1	0.9

以上本節で述べてきたことをまとめておく。小学校教師、保護者が「家庭」「高校までの学校」「大学の学部」「教師になってから」身につけるべき資質能力ととらえている項目には、それぞれ共通する属性が想定される。「家庭」「高校までの学校」では、「子どもが好きである」「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」などの社会的な態度が重視される。「大学の学部」では「教科内容についての知識が豊富」など教える内容・教える対象についての知識に重点が移っている。そして「教師になってから」は教師、保護者とも非常に多くの項目を挙げ、学級経営や授業方法等に関わる項目が出てくる。保護者の進学指導や評価の数値の高さは今日の教育課題を示している。

教員養成カリキュラムの構築にあたっては、「大学の学部で、身につけるべきである」と回答があった資質能力に注目することになる。「教える内容・教える対象についての知識」とまとめられるが、「大学の学部」以外で身につけるべきだと回答された項目について、養成段階では全く視野に入れなくてよいのかを検討する余地がある。また、あらためて教師になってから身につけるべきだと考えられている項目の多さが浮き彫りになった。学部段階の養成と教師になってからの教師教育の連携も視野に入れなければならないだろう。

図7 保護者が回答した家庭で身につける資質能力

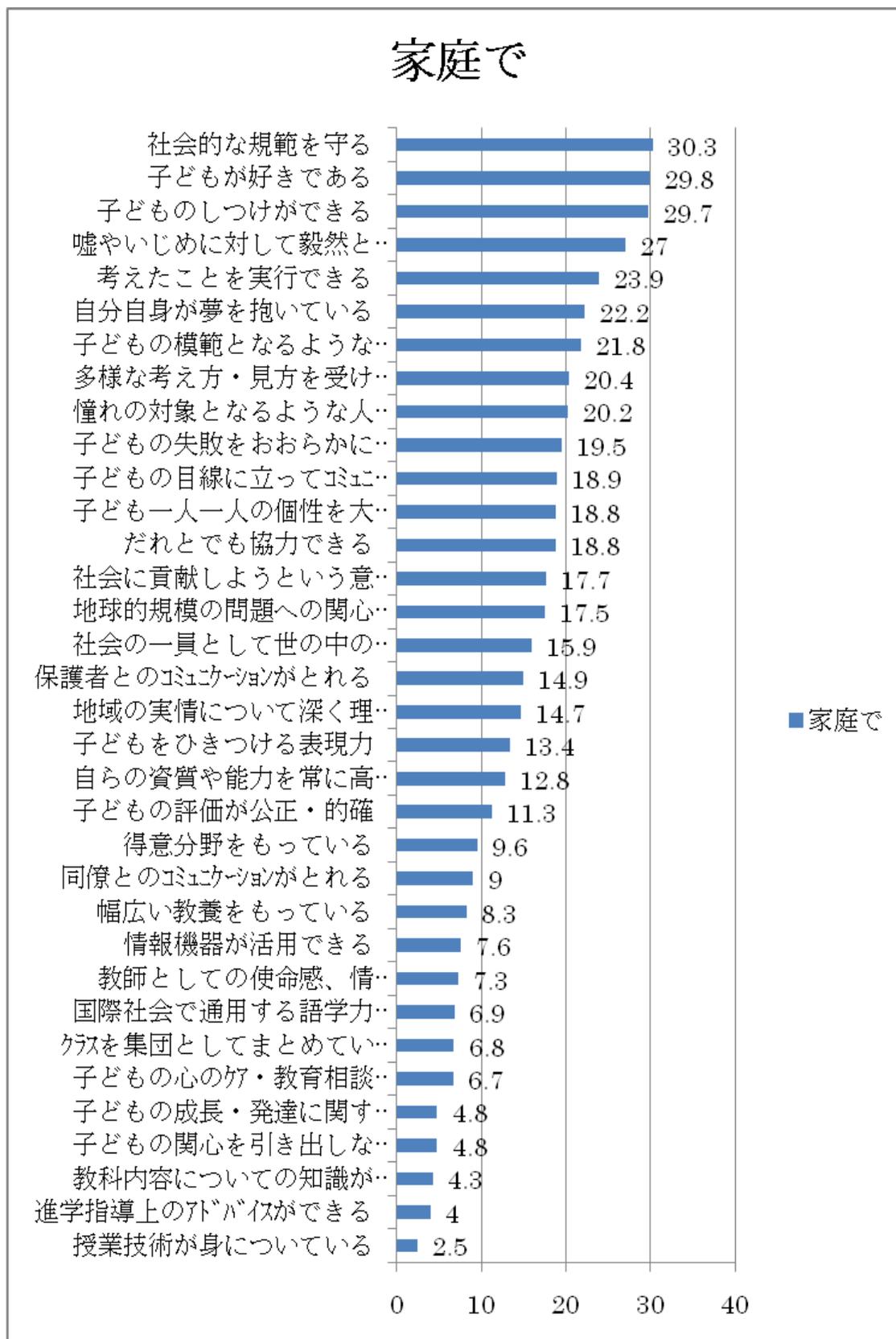


図8 保護者が回答した高校までの学校で身につける資質能力

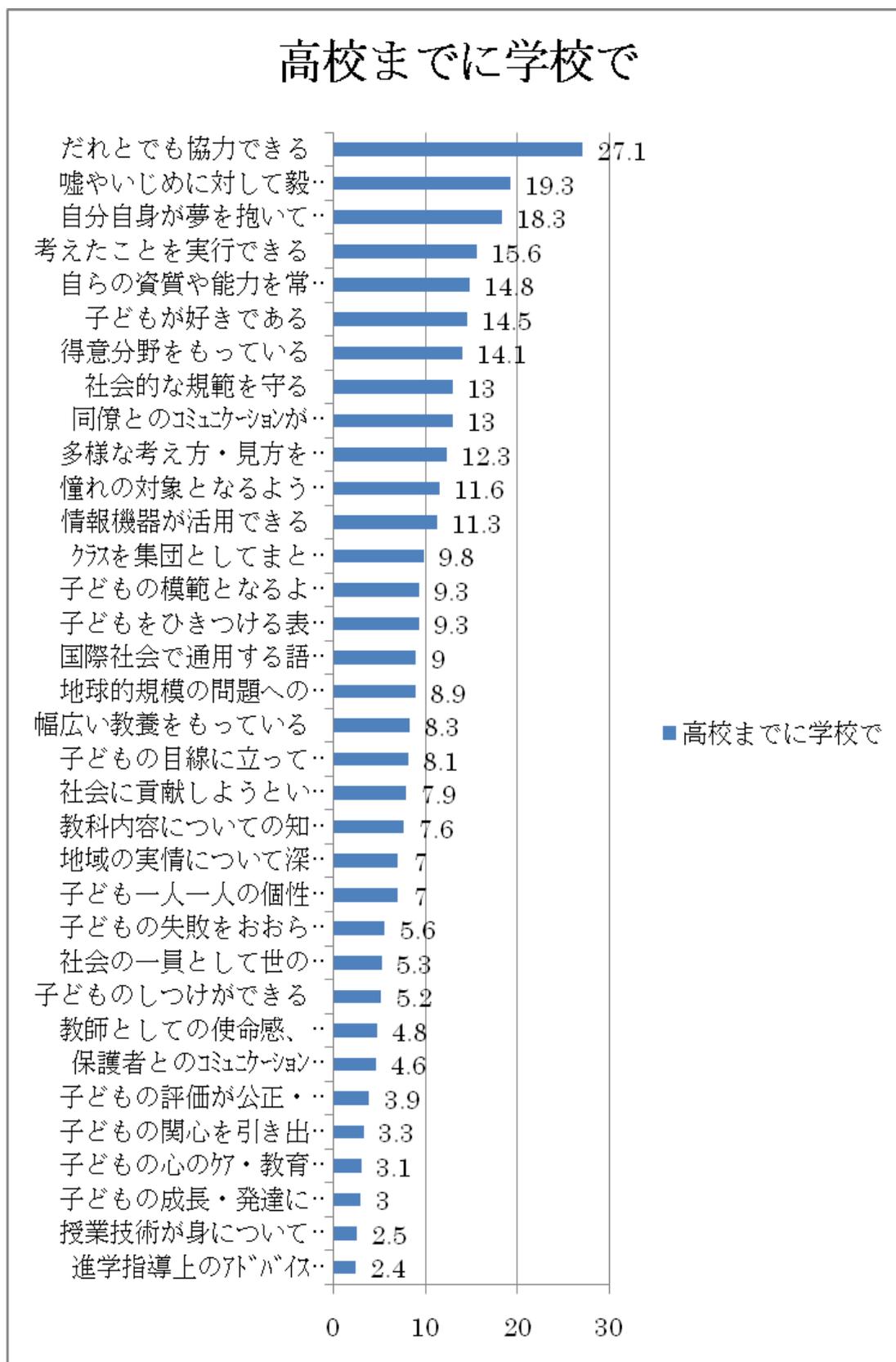


図9 保護者が回答した大学の学部で身につける資質能力

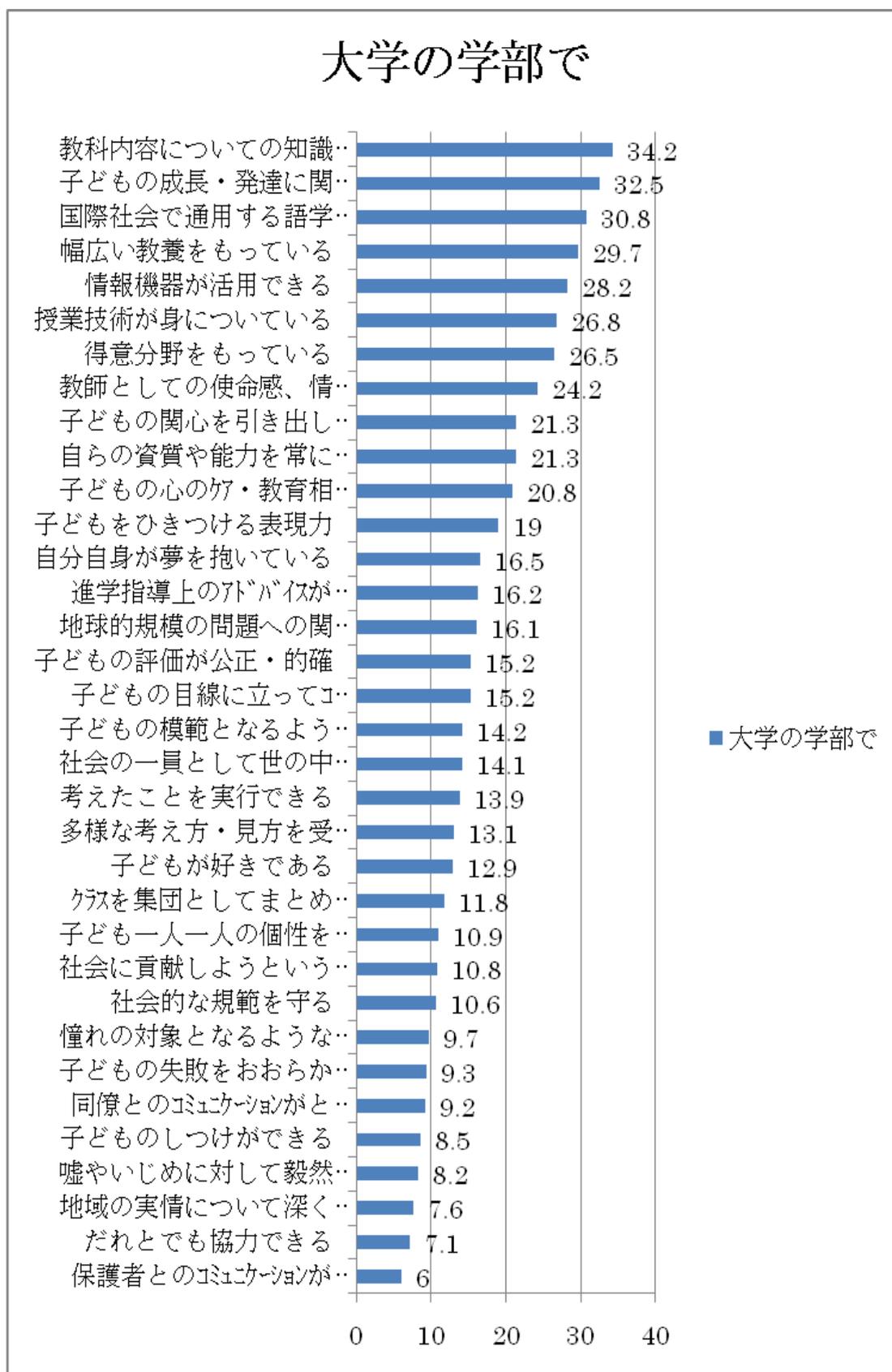
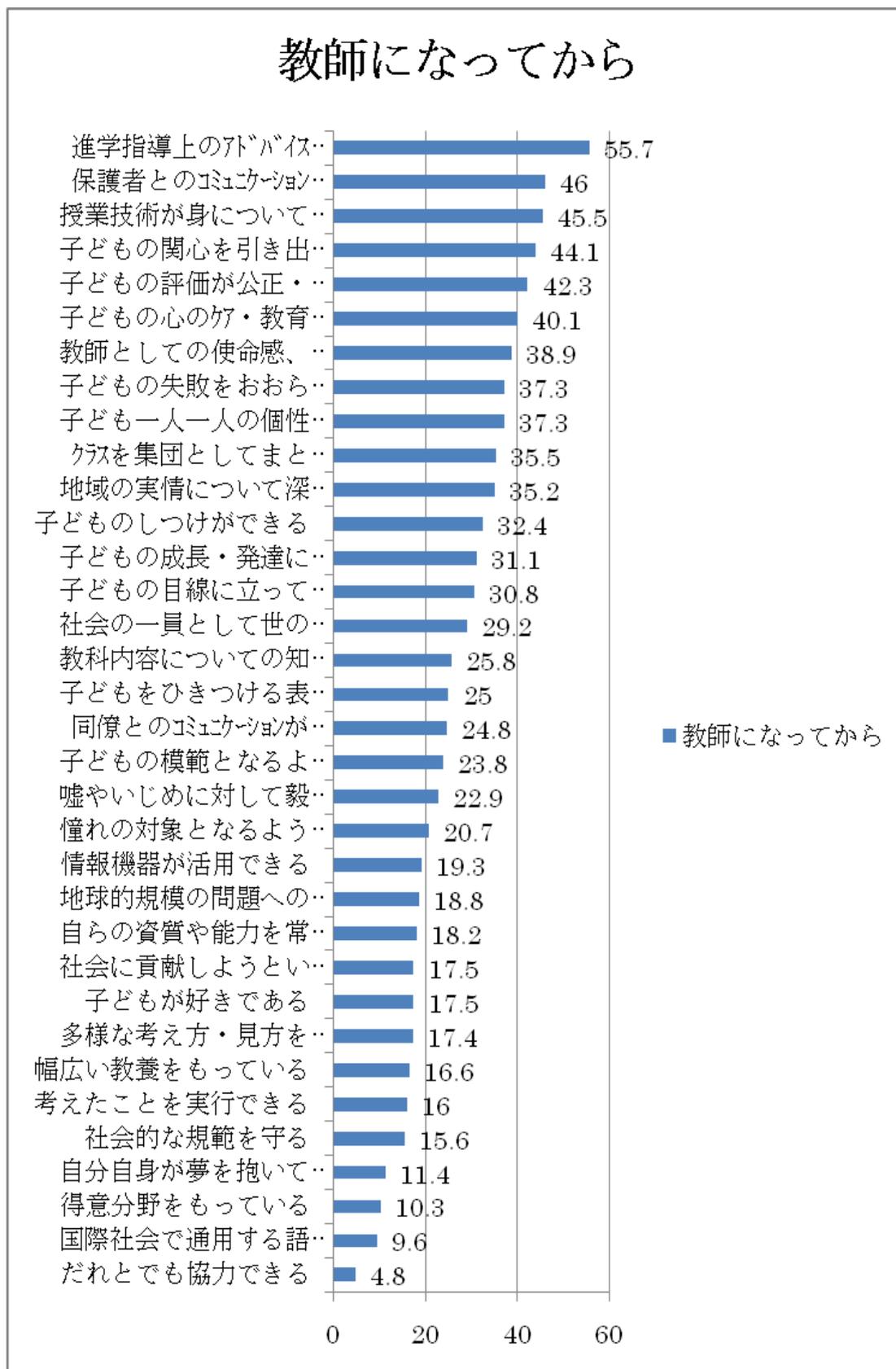


図10 保護者が回答した教師になってから身につける資質能力



8. 教師に求められる資質能力の小学校と幼稚園の比較

小学校教師と幼稚園教師（一般的に保育者と呼ばれる）とでは、同じ初等教育に携わっている立場とは言っても、それぞれが考える「求められる資質能力」には少なからず差異があるのではと予想される。

3歳から5歳までのいわゆる幼児を保育する幼稚園と、6歳以上12歳までの児童を教育する小学校とでは、その教育形態の違いはもちろんのこと、夫々の子ども観もかなり異なっており当然と言えば当然だが、今回のアンケート調査の回答からその違いを比較検討してみたい。

また同様に、幼稚園と小学校の保護者についても、夫々が求めている教師の資質能力について比較してみたい。

8-1 教師の回答の比較

まず、小学校教師と幼稚園教師が必要と考えている教師の資質能力で「是非とも必要」と答えた上位10位までを、単純に挙げてみる。

○小学校教師 <後のカッコ内は幼稚園の順位>

1位	嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる	(14位)
2位	子どもをひきつける表現力がある	(5位)
3位	自らの資質や能力を常に高めようとする	(4位)
4位	保護者とのコミュニケーションがとれる	(6位)
5位	クラスを集団としてまとめていける	(17位)
6位	子どもが好きである	(1位)
7位	社会的な規範を守る	(19位)
8位	子どもの関心を引き出しながら授業できる	(9位)
9位	子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる	(2位)
10位	多様な考え方・見方を受け入れられる	(16位)

○幼稚園教師 <後のカッコ内は小学校の順位。2位と9位は同率のため複数>

1位	子どもが好きである	(6位)
2位	子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる	(9位)
2位	子ども一人一人の個性を大切にす	(15位)
4位	自らの資質や能力を常に高めようとする	(3位)
5位	子どもをひきつける表現力がある	(2位)
6位	保護者とのコミュニケーションがとれる	(4位)
7位	だれとでも協力できる	(13位)

8位	子どもの規範となるような言動ができる	(16位)
9位	子どもの関心を引き出しながら保育ができる	(8位)
9位	同僚とのコミュニケーションがとれる	(12位)
9位	子どもの失敗をおおらかに受け止められる	(19位)

以上を比較してみていくつか傾向として言えることを挙げてみると、

1. 小学校教師は、まずはクラス全体と授業を大切に考え、自分自身の能力を高めたいと願いつつ、保護者との関わりも気にしている。
2. 今、正に小学校の教育現場で関心を集めている話題（子ども同士のいじめの問題や教師のモラル、能力不足など）をかなり意識している様子がうかがえる。
一方、それに比べて幼稚園教師の方は、
 1. 何よりも子どもが好きで、子どもの個性を大切にしたいと考えると共に、保護者や同僚との人間関係を気にしている。
 2. 常に子どもに目をやりながら、子どもの手本にならなくてはとの思いを強く持っている様子が見える。

この比較の中で、特に大きな開きのあった項目を挙げると、小学校で5位の「クラス集団のまとめ」が幼稚園では17位。同じく7位の「社会的な規範を守る」が幼稚園では19位と低くなっており、また逆に小学校では19位の「子どもの失敗をおおらかに受け止める」が幼稚園では9位に挙げられており、このあたりに子ども観、子どもとのとらえ方の相違が見えてくる。

他方、20位以下を比較してみるとほとんど変わりなく、特に情報機器の知識や語学力、社会貢献などは「どちらかといえば必要」という回答が圧倒的で、この辺りは共通して専門家にお任せといった傾向に受け止められなくもない。

ただ、下位の中でも、「自分自身が夢を抱いている」と「憧れの対象となるような人間的魅力」の項目に関しては、幼稚園教師のほうがはるかに上位で、このあたり小学校現場の現実の厳しさと、まだ幼児教育現場に残された柔軟性が垣間見え、興味深い結果となっている。

8-2 保護者の回答の比較

こちらも同様に、それぞれが「ぜひとも必要」と答えた上位10位を並べて比較してみると、教師の場合とはまた違った傾向が見えてくる。

○小学校の保護者 <後のカッコ内は幼稚園の順位>

1位	子どもの評価が公正・的確である	(7位)
2位	子どもの関心を引き出しながら授業できる	(4位)
3位	嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる	(5位)

4位	子どもが好きである	(1位)
5位	子ども一人一人の個性を大切にする	(3位)
6位	クラスを集団としてまとめていける	(13位)
7位	子どもを引きつける表現力がある	(6位)
8位	子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる	(2位)
9位	教師としての使命感、情熱、意欲をもっている	(12位)
10位	社会的な規範を守る	(15位)

○ 幼稚園の保護者 <後のカッコ内は小学校の順位>

1位	子どもが好きである	(4位)
2位	子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる	(8位)
3位	子ども一人一人の個性を大切にする	(5位)
4位	子どもの関心を引き出しながら保育ができる	(2位)
5位	嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる	(3位)
6位	子どもを引きつける表現力がある	(7位)
7位	子どもの評価が公正・的確である	(1位)
8位	子どもの失敗をおおらかに受け止められる	(13位)
9位	子どもの規範となるような言動ができる	(11位)
10位	幅広い教養をもっている	(18位)

保護者が教師に求める資質能力については、小学校の保護者と幼稚園の保護者とではそれほど大きな差は出ないのでは、という予測どおり、上位の項目はかなり似ているように見える。ただ、少し細かく見ていくとやはり夫々の立場の違いが受け止められる。

まず、小学校の保護者の傾向は、

1. とにかく、子どもを分け隔てなく平等に見てほしいという願いがはっきり見られる。

同時に子どもの個性を大切にして、クラスをまとめてほしいという願いもある。

2. また教師としての使命感や表現力といった個人の資質能力の向上も望んでいるようだ。

続いて、幼稚園の保護者はというと、

1. まずは自分の子どもも含めてであろうが、子どもを中心に保育をして、しっかりと子どもを見てほしいという項目が上位を占める。
2. さらに、保育技術はもちろん大事だが、もっと子どもの規範となり、しかも子どもの失敗は大目に見て欲しいという多少身勝手な親心がうかがえる。

両者は根底部分では似たような傾向も見られるが、ここでも先の教師の場合と同じく、20位以下はほぼ同じであるのに、「自分自身が夢を抱いている」という項目だけに関しては幼稚園の保護

者がかなり上位（11位）に挙げているのに比べ、小学校の保護者は27位と現実を冷めた目で見ているようである。

やはり保護者は、自分の子どもが小学校に行ってから教師に対する見方がかなり厳しくなっていることが推し測られる。

まとめ

予備調査に始まり、教師と保護者、地域の人々の資質能力についての調査、検証を行った。そして、今回の本調査に至るまでに3年の時間を費やした。

社会の変化と学校に対する社会の見方の変化、学校教育への期待の変化、教師に対する意識の変化、求められる教員養成大学の質の向上など、様々な変化や要請・要望により、現在の学校教育における教師に求められる資質能力の再検討が喫緊の課題となっている。

そのような状況の下で実施した本研究が目指すことは、保護者、地域の人々からステークホルダーの力を借り、現代の社会が求める教師の資質能力を明らかにすることである。

本研究では、調査項目の作成の段階から教師の資質能力について検討してきた。その結果からすでに紹介したいくつかの資質能力について、教師とそれ以外の人たちとの間で大きく異なる資質能力のあることがわかった。

必要と考える教師の資質能力は、立場の違いや教職経験の有無などが要因と考えられることもあるが、教師には、保護者や地域の人々の期待や要望を謙虚に受け入れ、自身が身に付け伸ばさなければならない資質能力について再考を促す内容になった。そうでなければ、学校は、また教師は、社会からの信頼を得ることは難しいし、同時に、社会の教師に対する要望や期待を一方的に受け入れる必要もない。なぜなら、教師の資質能力について責任を取るのには、教師自身であるからである。

教師自身が重視する必要な資質能力と異なる資質能力があれば、それをどのように受け止め、関連的に考えるかが大切になる。

例えば、教師に求められるコミュニケーション能力について言えば、教師が子ども、保護者、同僚との間で、問題解決の機会が多くなっている現状が明らかにされたし、保護者からは、教師の子どもへの公平・公正な評価や子どもが好きであり、子どもの目線でコミュニケーションできる力が必要という期待があることから、教師の子どもとのコミュニケーションへの関心や学級経営、自他への不安といったことが読み取れる。

とりわけ、教師にとってコミュニケーション能力は、子どもとの関係をめぐって、その広がりや指導方法の検討、研究が求められていると言えよう。

相手のあるコミュニケーションでは、相手の話を十分聞き出し、自分の伝える意見や考えを整理して分かりやすく述べるといった双方向の伝達で成り立っている。そのために、教師は、コミ

コミュニケーション能力を、一方が他方に言い聞かせるといったことや多弁な話上手をイメージするのではなく、相手の話を聞く能力と自身の考えや思いを話す表出力を関連づけて理解する必要がある。

コミュニケーションの内容について言えば、子どもを中心に考えながら、教師は学校の教育の基本的な考えを明らかにし、それに基づいて個々の課題や問題について保護者や地域の人々に話し、そして、聴くことが大切になると思われる。

教師に求められる資質能力を身に付ける場については、第3節の2でも述べたように、「大学の学部」では、「教科の内容についての知識が豊富」など教える内容・教える対象についての知識の習得に期待がかかっている。そして、「教師になってから」は、教師、保護者ともに学級経営や授業方法などに関わる資質能力の必要性が求められていることが分かった。

最後に、本調査研究を基にして、さらに教師に求められる資質能力について具体的な問題状況下でのその資質能力の働きを考察するなど、一層明らかにする必要があると思われる。その上で、それらの資質能力の育成法について検討することができる。教員養成大学でのカリキュラム開発として、教育内容の検討や教授方法での実践的な手法の導入、現役教師教育との連携が課題として残されたと考える。

Abstract

The purpose of this research is to develop new teacher training programs targeting on both present teachers and students in the teacher training courses through the investigation of the competence and ability of elementary school teachers. In 2007 a pilot survey about the expected ability of the teachers was conducted in some kindergartens and elementary schools. The result showed significant differences among teachers, parents, and regional inhabitants. They were different in the following three points: First, to improve teacher's own quality and ability; second, to communicate with parents; and third, to train children. In 2008, teachers, parents and regional inhabitants were interviewed about these three items and the results were analyzed. The full research in 2009 will clarify the required quality of the elementary school teachers.